

## 編集顧問の言葉

池谷敏忠教授ご退職後、私は思いがけず、大学院文学研究科英文学専攻主任を勤めさせていただくことになりました。それから、約9ヶ月、たいしたこともできずに過ぎてしまいましたが、この度、愛知淑徳大学大学院英文学会論文集第17号が無事刊行されることになり、専攻主任として、ほっとしております。

さて、池谷先生のご訃報を知ったのは、私が20数年ぶりに米国を訪れ、国際トマス・モア学会の開かれていたマサチューセッツ州アマーストに滞在中の2007年8月14日のことでした。3月末までご勤務されていた先生の突然のご逝去は本当に衝撃的でした。アマーストは米国女流詩人エミリー・ディキンソンの生家のある町であり、この地にある私立アマースト大学は米国にある多くの私立大学のなかでもとくにレベルが高く、詩人のロバート・フロストが長い間教鞭をとっていたことでもよく知られています。英詩、とくにアメリカ詩をご専門とされていた先生に、帰国後、ここでの報告をと考えておりましたので、それが果たせないのがまことに残念です。確かに人工透析治療を受けてはいらっしやいましたが、ご退職後、こんなにも早く旅立たれてしまうとは考えもしなかっただけに、在任中、やはり先生はご自分の文学研究と大学院での研究者の育成に骨身を惜しまず精進していらしたのだと改めて実感いたしました。

池谷先生は、心底、文学を愛し、文学のもつ可能性を信じていらした方でした。日本文学への造詣も深く、俳句の英訳をなさり、老詩人と自称され、折にふれ、詩や俳句を楽しそうにおつくりになっていらっしやいました。先生がこれまで主任として、論文集にお残しになったお言葉のなかに「文学は人間の生きかたを省察し、語学は言霊の核心を探求する」「ひたむきに研究に励むことが生の証なのだ」とありますが、池谷先生の尊いご遺志を引き継がれた会員の方々が、文学研究、語学研究に真摯に取り組み、それらのすばらしい成果が本号に発表されることになり、大変喜ばしく存じます。そして、最後に私も貴学会の今後の益々のご発展を祈念していることを申し添えたいと思います。

2008年1月10日

英文学専攻主任 久野幸子